様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１８７

研究課題名（和文）日本近代文学の欧米語翻訳黎明期の総合的研究～明治・大正時代を中心に～

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Early Translations of Modern Japanese Literature into European Languages, With a Focus on Meiji and Taisho Periods

研究代表者
河野　至恩（Kono, Shion）

上智大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：６０４３９３３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：明治期から昭和戦前期における日本近代文学の欧米語への翻訳状況を総合的に分析し、当時日本文学の翻訳出版に関わった翻訳者や出版社などについて調査した。その結果、この時代の日本近代文学の翻訳の大きな動向のひとつとして、日本研究との深い関連があることを示した。例えば、二葉亭四迷『其面影』を英訳（共訳）した グレッグ・シンクレアについて、1930年代にハワイ大学で東洋学研究所の設立に関わるなど、当時の日本研究の展開に深く関わっていることが明らかになった。また、森鴎外の小説『百物語』(1911)における鴎外の「世界文学」意識を、当時の鴎外作品の翻訳状況に照らして明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The goal of the present project was to grasp a comprehensive picture of the translation of modern Japanese literature in European languages in the early twentieth century (specifically from the Meiji era to the end of World War II). One of the major trends in the translation of Japanese literature in this period was its close relationship with Japanese Studies at European and North American universities. For example, Gregg Sinclair, a co-translator of Futabatei Shimei's "Sono Omokage" (translated as "An Adopted Husband" (1919)), was instrumental in establishing the Oriental Institute at the University of Hawaii in the 1930s. Sinclair's involvement in the Oriental Institute was examined. In addition, Mori Ogai's awareness of "world literature" as seen in the novella "Hyaku Monogatari" (Ghost stories, 1911) was studied in light of contemporary translations of Ogai's oeuvre.

研究分野：比較文学・日本近代文学

キーワード：比較文学　日本文学　翻訳論　海外の日本文学受容　文化交渉史　国際研究者交流　アメリカ合衆国：ドイツ：オランダ：英国：韓国

１．研究開始当初の背景

近年、文学研究において翻訳研究の意義が再評価されつつある。

例えば、David Damrosch, *What Is World Literature?* (2003) に代表される、比較文学研究における世界文学論では、執筆時の作家の伝記的背景、歴史的な状況などの発祥地の文脈だけでなく、作品の流通や翻訳といった、発祥地から離れた場所での受容のプロセスに注目する。世界文学論では、翻訳論は作品の本質から離れた二次的な問題ではなく、作品の価値に関わる中心的な課題として扱われる。

一方、近年、「トランスレーション・スタディーズ」など学際的な方法論を取り入れた翻訳研究が活発化し、翻訳研究の方法論についての議論も深まりつつある。

こうした文学研究全体の動向を受け、近年、日本近代文学研究でも「翻訳」の問題が改めて注目を集めている。

これまでの日本近代文学研究における「翻訳」研究の状況をみると、外国語、特に欧米語の文学作品が日本近代文学の成立と展開に果たした役割については重厚な研究の蓄積がある。一方で、日本近代文学の外国語への翻訳については、外国語からの翻訳よりも点数が圧倒的に少ないこともあり、比較的研究が進んでいない。

具体的には、日本ペンクラブ編 *Japanese Literature in Western Languages: A Bibliography* (1961) や国際文化会館編 *Modern Japanese Literature in Translation: A Bibliography* (1979) などの日本文学の翻訳の書誌・目録が編まれている。また、各国語の日本文学の翻訳・紹介の状況について俯瞰する記事も多く書かれてきた。しかし、その多くは状況の紹介にとどまり、日本文学の翻訳にはどのような人々が関わってきたのか、作家・翻訳者・出版社・研究者などのネットワークがどのように関わってきたのか、翻訳作品がどのように評価・研究され、どのような「日本文学」像を描いてきたのか、などの問題を分析した研究はごく近年まで少なかった。

欧米語への翻訳についていえば、昭和 30 年代から 40 年代に多くの作品が翻訳され、三島由紀夫や川端康成といった現在海外でもよく知られる日本近代文学の作家の紹介が進んだといわれる。しかし、それ以前の明治から昭和戦前期の翻訳については、二葉亭四迷の日本近代文学のロシア語訳、鴎外の国内ドイツ語雑誌への関わりなどの個別事例についての研究はあったが、比較的研究が進んでいなかった領域だといえる。

しかし近年、日本文学の翻訳、とくに昭和戦前期以前の翻訳状況についても関心が高まりつつある。例えば、（古典を含んだ）日本文学の翻訳研究としては秋山勇造の『明治翻訳異聞』(2000)『新しい日本のかたち』(2005)に収められた諸論文がある。また、山本亮介の論文「’*Kokoro (Le pauvre coeur des hommes)*’（仏訳『こゝろ』出版の周辺）―国際文化交流における文学―」(「日本近代文学」, 2007）や、同氏の科学研究費補助金研究「昭和戦前期における日本文学英訳出版に関する研究」（2009～2010 年、課題番号 21720067）などが最近の成果として挙げられる。

２．研究の目的

このような研究状況を踏まえ、本研究では、明治期から昭和戦前期における日本近代文学の欧米語への翻訳状況や個別事例を横断的・総合的に調査し、日本近代文学の翻訳・流通の諸相を当時の世界的な文化状況の文脈に照らして理解することを目指した。

具体的には、以下のような課題を設定した。

まず、明治期（特に日露戦争以降）から昭和戦前期に欧米語に翻訳された日本近代文学の作品を、既存の書誌を起点として調査し、翻訳の出版状況の全体像を把握すること。

次に、それらの翻訳の出版・流通・受容状況について、個々の事例を調査し、この時代の翻訳の動向を把握すること。

特に、日本文学の翻訳と日本国外の日本研究の関係に注目し、明治以降の日本研究雑誌や大学の日本学などにおける日本近代文学の翻訳テクストの位置づけ、また翻訳が「日本学」に与えた影響について、具体的な事例を通して分析すること。

さらに、「日本の近代文学が欧米語に翻訳され、海外で読まれる」という状況が、当の作家たちの自意識や「世界文学」認識にどう影響したのか、文学作品等に即して分析すること。

３．研究の方法

まず、日本文学の翻訳状況の全体像を把握するために、国内・海外の図書館や博物館に所蔵されている明治期から昭和戦前期に出版された日本近代文学の翻訳書（単行本・雑誌など）の書物を調査した。書籍の本文や序文を読むだけでなく、個々の書物に残された書店印や献本のメッセージなどの流通の痕跡を探し、分析した。入手可能な翻訳書・雑誌等の資料は入手した。また、同時代に出版された書評や新聞記事を検索し、収集した。

日本文学の翻訳出版に関わった作家・翻訳者・研究者・編集者について、出版物やアーカイブの資料を通して、誰がどのような動機から翻訳出版に関わったかを調査した。初期調査の過程で、これら翻訳に関わった人々には、欧米大学の日本研究（日本学）に関係する人々が多いことが明らかになり、その背景を解明するために、19 世紀後半から 20 世紀前半のオランダ・ドイツ・アメリカなどの大学における日本研究の展開と、そこに研究

者・教員・学生として関わった日本文学の翻訳者等について調査を進めた。
　さらに、明治・大正期の作家の「世界文学」意識と文学の翻訳について、特に森鴎外に注目し、作品に現れた世界文学や翻訳の概念について検討した。

４．研究成果

（１）20 世紀前半の日本近代文学の翻訳と日本研究について。

　20 世紀前半、日本近代文学の欧米語への翻訳はまだ非常に小規模のものであった。当時、日本国内の翻訳者が国内の文壇の評価に基づいて少数ながら作品を翻訳出版し、その一部は書評されるなど海外でも一定の評価を得た。しかし海外で幅広く受容されたのはごく一部であり、それも戦争文学やキリスト教文学、プロレタリア文学など、特定のジャンルの作品が大多数であった。日本近代文学の主要な作家の代表作が次々と翻訳されるのは第二次大戦後である。
　そうした当時の日本近代文学翻訳の動向のなかで特筆すべきなのは、まだ発展途上にあった「日本研究」との関係である。
　日本文学の欧米語への翻訳は、1847 年にウィーン大学の東洋学者であるアウグスト・プフィッツマイアーが柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』をドイツ語に翻訳し、原典の復刻と共に出版したのがその始まりだとされる。以後、日本文学の翻訳と日本研究は密接に関わってきた。
　日本文学の翻訳に関わった外国人翻訳者には、欧米の日本研究の学部でトレーニングを受けた人々が少なくない。また、後で述べるように、日本文学の翻訳者が欧米大学の日本研究に深く関わるケースもあった。
　また、ここでいう「日本研究」とは、単に大学内の研究・教育の制度だけでなく、文学作品を読むうえでの「読みのモード」も指す。つまり、日本文学を「文学作品」として評価するだけではなく、日本社会・文化の状況を知る手段として読むという読みのモードである。日露戦争後、国際社会で日本の軍事・外交での認知度が高まるなかで、日本人の日常を知りたい・伝えたいという動機が文学作品の翻訳へとつながったのである。
　本研究では、20 世紀前半の日本文学の翻訳を支える重要な動機のひとつとして、また、日本文学の翻訳に関わる〈場〉として、日本研究との深い関係を確認することができた。この認識は、後述（２）、（３）の事例研究の前提となっている。また、日本文学の翻訳と日本研究の問題については学会発表⑤で発表した。
　なお、当初は、日本近代文学の翻訳状況を総合的に研究した成果を書誌などの形で発表することを目指していたが、特に後述（２）、（３）の事例研究において重要な発見があり、研究の重心をそちらに移した。

（２）グレッグ・シンクレアの日本近代文学の訳業と、1930 年代におけるハワイ大学の日本学ネットワークについて。

　（１）に述べた日本文学の翻訳と日本研究の密接な関係を示すひとつの例として、グレッグ・シンクレア(1890～1976)が挙げられる。
　シンクレアは 1912 年に来日。二葉亭四迷『其面影』を光井武八郎と共訳し、1919 年にアメリカのクノップ社から *An Adopted Husband* と題して出版した、大正時代の日本近代文学の重要な翻訳者のひとりである。
　シンクレアによる英訳『其面影』の序文を見ると、日本の「家」制度という文化を知るための方法として本書を英語圏の読者に紹介していることがわかる。翻訳者自身が、上に述べた「日本研究」の読みのモードでの解釈を提示しているのである。
　その後シンクレアはハワイ大学に英文学の教員として着任し、1935 年には同大学に開設された東洋学研究所 (The Oriental Institute)の初代所長に就任している。
　シンクレア関連資料の調査を通し、シンクレアがハワイ大学東洋学研究所設置に深く関わっていたことを明らかにした。シンクレアは 1930 年代・アメリカ本土の大学における日本研究の拠点整備の動きを知り、アメリカ本土と東アジアの中間点にあるハワイ大学の地の利を生かした研究拠点の構築を目指していた。
　また、翻訳者でもあったシンクレアは、日本研究における翻訳の重要性を認識していた。後述する翻訳者のグレン・ショーらとも連絡を取りながら、日本文学の翻訳・研究を東洋学研究所のプロジェクトとして進めていた。
　また、シンクレアは、日本の現代戯曲を上演する地元の劇団や、日本文学を翻訳する日本人・日系人の大学学生団体などにも協力していた。
　ハワイ大学は 1960 年に開設された East-West Center など、アメリカ合衆国における日本研究の重要な拠点のひとつとして知られるが、既に 1930 年代には東洋学研究の拠点を構想しており、彼の個人的なネットワークを活用しつつその構築を推進していたことが明らかになった。1941 年の真珠湾攻撃とその後の日米戦争により、日本研究は中断を余儀なくされるが、戦後にはその基盤を生かしてハワイ大学の日本研究は大きな発展を遂げるのである。
　ハワイ大学の日本学に対するシンクレアの貢献について学会発表②、③、⑦で成果を発表した（ハワイ大学における講演を含む）。

（３）グレン・ショーによる日本近代文学の翻訳と紹介について。

倉田百三『出家とその弟子』、菊池寛『藤十郎の恋』などを英訳した大正・昭和戦前期の最も重要な日本文学翻訳者の一人、グレン・ショーと、彼の翻訳書を出版した北星堂について、その人的ネットワークと翻訳書への反応について調査を行った。

シンクレア同様、ショーは 1910 年代の初めに来日したが、ショーは 1930 年代後半まで日本に在住して翻訳を続けた。翻訳技術だけでなく日本の現代文学シーンに通じていたショーは、「日本現代文学」を日本国内の文脈に即して自然な英語に翻訳出来るという意味で、大正・昭和戦前期には希有な存在であった。特に、1935 年にカナダのアジア研究雑誌 *Pacific Affairs* に掲載された“Contemporary Japanese Literature: A Foreigner's View”という記事は、短いながらも、現代日本文学の潮流を明治以来の日本文学史の文脈に位置づけつつ紹介しており、1930 年代に英語圏の「日本現代文学」像を定位しようとした重要な例の一つといえるだろう。

ショーとシンクレアの関係について学会発表②で、北星堂出版におけるショーの翻訳出版、その受容については学会発表④で、ショーの日本現代文学の翻訳・紹介については学会発表⑥で成果発表を行った。

（4）森鴎外『百物語』における「余所の国の読者」と「世界の文学」

森鴎外の小説『百物語』(1911)において、この小説が「余所の国の読者」に読まれ、「世界の文学の仲間入」をする可能性について語り手が読者に語る場面がある。小説の語り手自身が、小説が翻訳され「世界文学」として読まれる可能性をあらかじめ示しつつ語るということは、小説の語りの戦略として興味深い。

鴎外自身、『百物語』執筆の時点で、自らの小説『舞姫』が二葉亭四迷によりロシア語などに翻訳されていることを知っていた。その意味で、この語り手が語っていることはそれほど「途方もない考（かんがえ）」ではなかったのである。

本研究では、1911 年時点での鴎外作品の欧米語への翻訳状況と、『百物語』の語りの戦略と外国文学への言及を通し、『百物語』における「世界文学」意識について分析した。その結果、鴎外がこの小説で語る「幽霊」は、鴎外が読んで知っていた世界文学の文脈のなかで理解されるべきであることを示した。この研究については、学会発表①、図書①で発表した。

以上の調査研究に加え、本研究に関わるワークショップを開催し、20 世紀前半における日本文学の翻訳に関する研究成果の発表と議論を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 7 件）

① Shion Kono, Mori Ōgai and World Literature （招待講演）、2013 年 2 月 13 日、フンボルト大学（ベルリン）

② 河野至恩、昭和戦前期におけるハワイ大学の日本学ネットワーク、日本比較文学会第 51 回東京大会、2013 年 10 月 20 日、早稲田大学文学学術院戸山キャンパス

③ Shion Kono, Gregg M. Sinclair, The Oriental Institute at the University of Hawai'i (1935-41), and the Pre-World-War-II Translation of Modern Japanese Literature（招待講演）、2013 年 12 月 4 日、ハワイ大学マノア校（ホノルル）

④ Shion Kono, The Hokuseido Press and the English-Language Translation Network in the Interwar Japan、Workshop “Trajectory of 'Japanese' Texts in the Early Twentieth Century”、2014 年 3 月 8 日、上智大学四谷キャンパス

⑤ Shion Kono, Reading Japanese Literature through the Lens of Area Studies （招待講演）、2014 年 10 月 10 日、ダラム大学（英国ダラム）

⑥ Shion Kono, Discovering “Contemporary Japanese Literature” in the Early Twentieth Century、2015 年 3 月 7 日、上智大学四谷キャンパス

⑦ 河野至恩、地域研究から翻訳を読む—20 世紀前半における日本文学の英訳、2015 年 3 月 20 日、東京外国語大学（東京都府中市）

〔図書〕（計 1 件）

① Shion Kono, Mori Ōgai and the 'Literature of the World': Reading *Hyaku monogatari* (1911) through the Eyes of the Foreign Reader、Klaus Kracht (ed.), ”Ōgai” - Mori Rintarō: Begegnungen mit dem japanischen *homme de lettres* (Harrassowitz Verlag, June 2014), 269-286.

６．研究組織
(1)研究代表者
河野　至恩（KONO SHION）
上智大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：60439338